

里地通信 12月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階（財）水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ： <http://member.nifty.ne.jp/satochi/>

里地セミナー報告 里山の自然の中での土の子育てと 谷戸の保全活動

講師：相川明子さん
山崎の谷戸を愛する会代表
青空保育なかよし会



なかよし会の発足

なかよし会というのは、0歳～3歳児の子育てを一緒にしようという親子の会です。1985年に自分で自然の中での保育をしたいと思って張り紙をして仲間を探

したのが最初です。

それよりもっと前に住宅開発が行われて、私は30年くらい前に引っ越してきました。

私が子育てを始めた20年くらい前、鎌倉ですでに少子化が始まり、子育てには仲間が必要でした。子どもにも親にもです。私は保育園で保母をしていましたが、保育園は時間に刻まれていてやりたいことが十分できませんでした。お散歩に行っても給食までには帰らなければならないというふうに行動が全部決まっているのです。その頃たまたま新聞で東京の世田谷区の母親グループが親達だけで幼稚園に行かずに子育てをしているという試みを見たのです。それにヒントを得てすぐに張り紙をしました。せっかく豊かな自然があるのでそこで遊ばせたいという思いと、友だちを得たいという人が集まれば、この近所で子育ての仲間作りもできるんじゃないかと思いました。それと、これまで自由に青春してきた若い女性が子育てになると、あっという間に子どもの奴隷になってしまって自分のゆとりがなくてストレスが溜まるというのも実感しました。子育てはもちろん楽しいのだけど、核家族となると夫は昼間勤めに行って、最近話題になる主婦のストレスの走りのようなことを20年前にも感じていて、その解消に2、3時間子どもと離れる時間を作るといいと思ったのです。子育ての会には子どもに友だちができる、自分を取り戻して仲間ができる、自然の中で育てられるという3つのメリットがあるのです。

子どもは1歳から2歳でほかの友だちが欲しいという要求が出てくる。外だけで保育するので歩ける頃がいいかなと思って、1歳半くらいの子どもから募り始めました。1歳児というのは4月の時点で1歳の子です。

今日皆さんと一緒に歩いたのは3歳児クラスなので、半分の子は4歳です。他にも担当がいて、私は1歳児、2歳児を担当しています。1歳児は6人、2歳児は10人です。3歳児クラスは13人ほどで週1、2回お弁当を食べて解散という風になっています。

谷戸の変化

今日お話ししているこの建物の下は昔は田圃でした。今日最初に集合した日当公園の下の辺りがその30年前くらいに開発したところですよ。それからため池が林の陰から見えますがそこも元の姿とは変わりました。ししいしから暑いねって言いながら歩いてきたけれど、昔は1メートルくらいの道がくねくねと歩いてたんですよ。谷戸ってくねくねした道が林沿いにあるから、この曲がり道を曲がると次に何があるかなってという楽しみがあったんですけど、今は予想する楽しみがなくなってしまいました。その“わくわく感”が良かったんだけどね。屋根の向こうに公園があって、山道を“すすす”と降りてくると谷戸があるというのがとても良くて、最初はそのコースでした。この池もうっそうとしていて、田圃があって、おたまじゃくしがいて。ししいしに登りたいなあと言って登っていると昼になって、そこでお弁当を食べて帰ってくると言うことを最初の5～6年くらいは行っていました。

なかよし会の一年・五感を使って

谷戸は一年中遊びやすいのです。4月に新しい親子が入ってきます。親も子どもも初めてで不安定ですよ。それに青空保育で園舎がないというので初めての親子は安定しないです。私は園舎は要らないと思っていますが(笑)。でも、毎日集まる根拠地が決まっているのでそこにみんな集まってからのんびりと谷戸までやってきます。そしてここがお庭なんだねって、親も子どもも思うようになるというのが最初の夏までの過ごし方です。親は何も指示しなくても子どもはそこそこ遊んでますよ。それに同じ場所でも季節が変わるので子どもは楽しくやっています。どこまで仕掛けを

したら十分かということを考えないで良いほど変化に富んでいます。今日は最初の坂道は子どもは走ってま



したが、1歳児の子どもはできません。だから最初は“ぺたんとお尻をつくだよ”ということだけ教えます。すると、こどもはお尻ですべてできるようになります。木の根っこが多いところではそこにつかまって登ることもできます。子どもは何も言わなくてもできるようになるのです。1歳児はゆっくりそこを降りて登るというだけで終わりなんです。子どもの視線は低いからなんでも落ちていたものを拾って、いろんなことを発見します。石ころも木の枝も子どもは好きなんです。木の風合って冬でも温かくて冷たい感触がないですよ。今日は棒をみんな持っていました。谷戸の下に降りていくと、風が吹いていて、住宅地の物音ではないものが聞こえています。

今日はこおろぎがいたんだけど、大きい子は走って行ってしまいますね。小さい子はとまって聞いています。ゆっくりゆっくり降りるほど良く聞こえますし、匂いもしますよ。子どもは五感で自然とふれあうということです。まずお尻でおいて、手で触って。もちろん、見て探しますから視覚。鳥の声、虫の声、ゆっく

りしたところで聞いていくということで、聴覚。入り口でピンクの葛の花がありましたが、いいにおいですね。子どもと一緒にいると敏感になりますね。その季節ごとに匂いが変わるのを子どもは体で吸収していきます。これが嗅覚。大事なのは言葉で表現するのではなくて、匂いも体験によって体にしみついていくことです。食べることにあついても結びついているのです。初夏には桑の実が採れるのですが、桑の実、食べた人はいますか？谷戸には桑の実が多くて、今年少ないと思っても次の年にはいっぱい取れます。子どもは桑の実が見えなくても、慣れてくるとにおいで桑の実だって言います。私も若い頃都会にいましたから一旦は鈍っていたんだけど、今ではお母さんがどうして分かるのっておっしゃるくらいの嗅覚を身につけました。子どもは理屈ではなくて、繰り返しの経験で分かってくるのです。意識したものではなく、美味しいとか何も言わなくても、もくもくと食べていけば、美味しいってことで、子どもは小さければ小さいほど、素直に反応します。体にしみついたら味覚です。後からお話する「自然探検隊」なんかで小学生を指導すると、自然に触れていない子ほど、虫って嫌だったり、草に触れるだけで嫌だったりするんだけど、小さければ小さいほど、疑いもなく好きになります。

私たちは雨の日も谷戸で過ごします。木があるとそんなに濡れません。ほんとにどしゃ降りの雨以外は過ごせるのです。朝は晴れていたのに、にわかにかき曇るといような経験はちょっと恐いような感じもあるけれど、そういう体験を谷戸の中でさせるというのが大切です。昔はどこかの村にも神社がありました。神社は表の燦爛と日の光があたる所その他にお化けが出そうな裏の場所があって、その明と暗を体験させる最高の場所でした。そういう明と暗というを知るというのは早いうちからあった方がいい。人生には明るいところも暗いところもあるんだっていうのをなんとなく伝えられると思うのです。

おとなもなかよし

なかよし会の良さっていうのは自然の中において、安心した気持ちでいられることが一番なんです。それと大人たちに対する信頼感が得られることです。どの親も自分の子ども以外には接したことのない状態で始めるんですが、始めるといろんな子どもがいて、顔が

違うようにひとりひとりの違いがよく分かります。一番最後までジッとしていて、始めるともくもくと最後までする子、坂道で泣き出しちゃう子、いつもはぼーっとしているのに桑の実で顔が輝いちゃっている子。そういうのをみていると、平均よりも背が低いとか、歯が生えないとか、一人でいると気にすることを、集団でいる中で安心していきます。大人の中に“構え”がなくなっていくと、肩の力が抜けてきます。それぞれ個性を見て大人の力が抜けるんです。お当番に入って毎回他の子と接するうちにみんなが可愛くなっちゃうしねえ。突然10人の子どもを持ったみたいになっちゃう。最初はよその親に子どもを預けると言うのも難しくて、不安なだけで、実際に子どもと2、3時間離れていると、子どもは親と離れていてもその時に違う輝きを見せるんだというのが分かるの。よその親に子どもを預けて、「今日とっても楽しそうだったよ」という話を聞いたり、他の子を見て、親と離れるといつも泣いてた子が生き生きしていたりするのを見ると、眼が開けてくる。親同士も信頼関係が築けます。大人同士がお互いを信頼し合い、共感し合う雰囲気の中で育つと子どもにもそういう雰囲気が伝わるんだと良く分かります。幼稚園で自分と先生との付き合いしかない、一人の先生に不信感を持ったりするとそれが子どもにも伝わって、ずっと悪循環があります。それからどうして自分の子どもはいつも叩かれるのかと思っていても、皆で話してみれば自分ひとりでは見えないいろんなことが分かってくるので親同士も解放されてきます。それは本当にいいところ。子どもはそういう安心できるものに取り囲まれて育っていくのでしょ。

海とのふれあい

この時期は暑いから谷戸に来ないで海に行くことが多いです。鎌倉は山も海もありますからいいところですね。海にもいろんな状態があって、昨日行ったときは波もなかったけど、波がある日にはアサメとかカジメとかホンダワラとかの海藻が上がっています。それを子どもと一緒に食べたりします。子どもは海をなめるんですよ。そうすると、いろんな味がします。子どもはいろいろ言えないけどきっと分かるんですよ。海藻をちょっとかじるとね、ホンダワラはおいしいんですよ。大人がかじると苦いんだけど、延々とそれを食べている子もいます。それでお腹を壊したって

いう話もないしね。海の幸ってというのは何でも食べられるのです。山だってそうで、食べられないものの方が少ないくらいなんですよ。

それから、秋の海って夏の温度を吸収しているから、いつまでも温かいのです。温泉みたいで、昨日はずーっ浸かっていたんですよ。それで泥を触っているんです。それだけを1、2時間やっているだけで、強制するわけじゃなくて、子どもは波が恐くなくなってくるんです。

秋にクラゲが出て海に行けない時はプールに行くこともありますが、市営プールでもどこでも、すぐに監視人のお兄さんに「そこいっちゃだめ」って言われるし、子どもたちがいつもどおりすっぽんぽんになるとすると怒られるし、カメラの持ち込みもだめだし、匂いもきついし...いい思いはしません。公立の中学校なんてほとんどそうでね、年々「それはだめ」というのが増えていく。そういう管理された社会に子どもはどんどん入っていくんだと思うと、そこから解放されているのはなかよし会だけじゃないかなという思いを深めます。

手伝ったり・けんかしたり

なかよし会で子どもたちは人との関わり方も学んでいきます。最初は自分とお母さんという関係だけしかなかったのが、他の人とか自然とかいろいろと出会えます。最近の様々な子どもたちの事件を見ていて、子どもたちはお母さんの「過干渉」を受ける一方、しっかり周りの者に愛されてこなかったんじゃないかなって思ってしまうんです。お母さんに猫可愛がりされる以外に、他の人に認められて、「自分は何をしてもいいんだ」って思える時間がなかったんじゃないかな、と。そういう時間が必要じゃないかなと思います。

集団の中の良さというのは、小さい子でもお互いに“手伝いっこ”することができるということです。リュックからお弁当を出すとか、服を脱ぐとか、それができる子とできない子がいるときに、1歳でも2歳でも親が手をささなくてもお互いにできるから大丈夫なんです。それも遊びなんです。子どもたちも、早生まれと遅生まれですごく違いがあるのですが、できる子はできなくて泣いている子のところに行って、手伝いをするのが楽しいんです。必ずしも月齢だけで違ってくるのではなくて、洋服を脱ぐのは上手いけどお弁当を出せない子がいたり、跳ぶのはできて口が

遅かったり、必ずしも何でもできる子なんていないんですよ。それぞれがいいところを持っているから、いいところをうんと誉めてあげるとその子はそこで自信を持って、親がびっくりするほど飛躍的に伸びたりしますね。

誰でも嫉妬心とか残虐心とかを小さい時に経験しておかないと、大人になってから変な形で出てしまうと思うんです。だから集団の中でたくさんけんかも経験させることが大切ですね。子どもたちを見ていると面白いですよ。けんかをして誰かが「わあっ」と泣くでしょう。そうすると友だちがやってきて最初は頭をなでてやるんです。その子どもが泣き止む。するとその次の瞬間に叩いたりするの。また、わあんって泣く。要するにその子の中にはいじめたい気持ちと、なでてあげたい気持ちが交互にあって、それを子どものうちに出させないとだめだと思います。そういうことを何回も経験するうちに自分の中でコントロールすることも分かってくる、そういう経験を早いうちにさせる方がいいなあと思います。誰かの眼を突いたりして大怪我になったら大変ですから、その寸前で止めるために親がいるだけで、親がしきったりせずに放っておくと、小さくても年々協力する心や社会性が出てくるので面白いです。

やんちゃおの発足

そういう風に3年間なかよし会で過ごした後、卒会をします。ところが4歳になってからも自分たちでやろうという人たちが5人いました。そこでその5組で「やんちゃお」という会を作りました。自主保育というのは親がとってもエネルギーを使うから大変なだけけれど、幼稚園行かないでこのまま親を中心としてやろうとしたのです。ここまでいった親というのはすごいと思います。親だって人間ですから大変なこともいっぱいあって、いつもいつもいいわけではなくて、けんかもします。三年間も一緒にいるんですから、「ああ、今大変だね」とか思うこともありますが、最終的には大丈夫なんです。

山崎の谷戸を愛する会

続いて「山崎の谷戸を愛する会」の話します。今見ていただいたように、田圃にはこんな建物が建っちゃうし、小道がアスファルトになっちゃうし。最終的には鎌倉中央公園になるので、住宅地になることはな

くなったわけですが、どうせならばよい公園をみんなで作りたいたと思ったのです。ここは青空保育の根拠地です。ここをよい環境のまま残したいということではなかよし会の親が、「山崎の谷戸を愛する会」を始めました。

いろんな代のOBの人が重要なポジションについて始めました。私たちが会を作ったのが1990年で、すぐにはいうことを聞いてもらえなくて、第一工区という3分の1の計画を変える時間はありませんでした。でも、残りの部分だけは手を入れて欲しくないという思いで活動してきて、さっきの田圃のところはデイキャンプ場になるはずだったんだけど、1997年に市は最初の計画案を変えました。それ以外のところも、最初は湿地にして欲しかった所は広場になってしまったし、道は土のままにして欲しいと言ってもあのように砂利舗装されてしまうし…。どうしようもないこともあるけど、賞を取ったり、助成金をもらったり、いろんなことをやって、ようやくあの程度ということで、それをどう評価したらいいかは見る人によるのでしょうか。

子ども自然探検隊

小学生の子どもたちに原体験をさせておくというのはとても大切なことだと思います。それで2カ月にたった1回だけど、1年から5年まで30人余りを谷戸に連れてきて一緒に遊んでおり、それを「子ども自然探検隊」と呼んでいます。大半はなかよし会の卒会生だけだね（笑）。それでも半分弱は新人も入れて遊んでいます。

今日田圃の中にあつた“かかし”も子ども自然探検隊で作ったものです。かかし作りの現場もとても楽しかったのを見てもらいたかったのですが、あのときはほんとうに15人くらいしかいなかったんですよ。あれは7月でした。5年生から一番小さい1年生までで、男女2つのチームに分かれて、どんな風なのでもいいから谷戸の中の物を使ってかかしを作ろうという企画をしたんです。そうしたら「かかし」ってどういうものという説明から始めなくてはなりません（笑）。でも、かかしに着せる「ぼろ」だけは、私のシャツを提供し、同じくらいの人数で、鋸と斧で好きにやっごらんって言ったら、男の子は腐った木を2本持ってきて、ほとんど腐りかけてるけど、ま、とにかくやるっていつて作り始めました。女の子はアズマネザサをいっぱい切り出してきて、何本か合わせたの

を支柱にして、作りました。大人としては思うこともあったのですが、ずっと見ていました。当番のお父さんもにやにやしながらずーっと見てたのですよ。蔓の紐で最初に木を2本十字に組み合わせてしまった男の子たちは後からシャツが着せられなくて困りました。女の子はちゃんと着せてから十字にしたんだけどね。小さい子たちも、お姉ちゃんやお兄ちゃんの言うことをききながら楽しくできたのでよかったのでしょうか。親が作ったのもあったんですよ。

以前、神奈川テレビが取材に来たときに3、4年生が4人くらいいまして、「どうして谷戸がいいの？」ってという問いに答えて言いました。「谷戸に来ると気を使わなくていいからほっとするんです」それを聞いたとき、小学校5年生で、もうそういう思いがあるんだなあって、驚きました。その他に「学校の仲間と違う友だちがいるから。」って言う子もいました。学校の仲間こういう所が楽しいと言っても分かってくれないんですって。こういう楽しさが分かる子って、今学校では1クラスに1人いるかないかかもしれないなって思います。親よりも子どもたちの方が、日々それを実感しているのではないのでしょうか。

谷戸を守る人

これまで何度も谷戸という言葉が繰り返してきました。でも、谷戸って本当はどういうところを示す言葉か知っていますか。三方が山で、雑木林から出てくる清水が小川になって湧き出てきて、その絞り水を使って段々の田圃が、奥からずっと下に向かって続いているというような場所のことです。そして、そういう田圃が洪水を防いだり、土を守ったりしている場所が谷戸なのです。だから本当は今谷戸本来の姿はないのです。結局地主さんがいて、田圃をしてくれていないとだめなのです。田圃を耕作しているときはうっそうとしている木も切らないと田圃が陰になります。山にも適度に手を入れて5～10年の単位で木を切って新陳代謝をしないと木自体の生命力が落ちてくるんです。だから、今の谷戸は本来の谷戸の姿ではないのです。手を入れ過ぎて公園になってしまったこの建物の場所と、手を入れなさ過ぎて草ぼうぼうになってしまった日当公園のすぐ下の辺りと、極端な二つしかないのです。30年前くらいは地主さんも手入れをしていたんですが、公園になると発表された30年前以来、木の手入れをしない地主さんが増えてしまいました。このままで

は20年放っておいたら山崩れになりそうなくらいです。私たちは谷戸本来の姿に戻すためには、田圃が命だと思って、関根さんをお願いして田圃を修業をさせてもらいました。あそこの特徴なので、そういう中で少しずつ方法を教えていただいたのです。その実績が実って田圃は市民体験田になりました。今は8つの団体で「谷戸ボランティアの会」を結成して、それぞれ独自にまたはいっしょに活動しています。そのうち一つは「なかよし会」で、もう一つは「山崎の谷戸を愛する会」、もう一つは「鎌倉で炭を焼く会」です。この「鎌倉で炭を焼く会」は、谷戸を谷戸らしく保つには周囲の山を手入れしなくてはならないということでお父さんたちが雑木林班として活動していたのが、夜、お酒を飲もうなんていうことになっているうちに良くなって、そこから発展して炭焼きを始めました。お父さんの趣味になって、3年目だけど、ずっと一緒にやっています。それから「かまくら環境会議」という団体もあります。あと、シルバーの方々の団体が2つあります。鎌倉市は非常に高齢化率が高いのでその比率から考えると当然ですね。こういう7団体で管理をすることになって、今年で3年目になります。この建物の1階にある掲示板なんかと一緒に活用させていただいています。

市との協力

市というのはみんなのことを考えなくてはならないものです。いろんなことを考える市民がいる。

鎌倉は環境自治体会議などに参加していて、行政とパートナーシップが生れているとよく言われますが実態は全く伴っていません。今まで関根さん(地主さん)との付き合いで私たちはかなり自由にふるまえたのですが、市の土地になった今ではいろいろな制限も生まれました。

例えばこれまでは冬になると関根さんの敷地でたき火を行って、せりの味噌汁を作ったりしていたのですが、今はいっさい火は使えません。田圃では切ったものを燃やすのは当然、のはずなのですが。私たちも不審火にはとても警戒していますから、禁止する側の気持ちも分かるのですが。

それから、1年も先のことをしっかりこれをやりませうという風に計画書にして提出しなくてはなりません。だから私達だけだったときは「それ面白いから来月やろうよ」なんて楽しいことに飛びつく自由があっ

たんですが、市の計画に入っていないと何もできないのです。1年も先のことなんて考えただけで一気に行きたくなくなってしまう。私たち、なかよし会を経験していると、冬になってたくさん歩くようになると、途中で子どもがこっちにいこうよというとな変わってしまうことがよくあるんです。そんな時でも途中で「今日のお迎えはこっちよーっ」て電話すればすむことで、その時に気持ちの赴くままにやっていく楽しさを、私たちはよく知っています。そういうお母ちゃん方でやっているから、なかなか予定表には慣れません。

それでも、行政のやり方に少しずつ合わせています。先の工事のことについては今要求しておかないと通らないとかね。もうちょっとそれを自由にできないかなって思うんです。ある程度お金もつけるから自由にやってくださいというような、包括承認まででないものかと思っていますが、なかなかです。行政からの委託というのは一つに留まるから、ここは鎌倉市財団法人公園協会ということでいちおう行政ではない形です。そこから二重委託ということはむずかしいのです。市民を交えて運営していくために、運営協議会が開かれています。この運営協議会は公募で選ばれた4人の一般市民、7団体の代表が4人、町内会の代表が2人、行政マンが2人の合計12人で成り立っています。そこで、いろいろな提案をして、受け入れてもらうこともあります。さっき芝生広場で言った、盛り土があるところで、農林作業体験施設というのを造る予定です。今、田圃や畑の仕事のために道具が必要なんだけど、今はこの建物から田圃までがらと運ばないとだめで大変なんです。近くにあった方がいいので、そういう物置の意味も持ち、また、わら細工や蔓細工もできる部屋や、煮炊きできる土間をつけたものを要求していて、それが建つことになっています。あの広場に煮炊きのできる窯もつけてもらえるようになるので、誰か土日だけでも火の管理をするようなコーディネーターをつけて欲しいということを要求しています。あと2年後に開園するときうまくいくためには今から要求しておかなくては。田圃・畑の体験だけでなく、プレーリーダーの方式もここでできるようになったらいいなあと思っています。毎日は大変だけど、週に1、2回くらいは、遊び場を有給で管理してもらえるようになればいいなあと思っています。

里地セミナー報告

心を育む総合学習・ 付属鎌倉小学校での実践

講師：小池敏夫
横浜国立大学教授 付属鎌倉小学校元校長



こんにちは。私は、平成5年4月から9年3月まで、横浜国立大学付属鎌倉小学校の校長を務めておりました。附属の場合、校長は大学の教授が併任して行うことになっています。附属には、朝会のある月曜日、必要に応じて他の曜日に出勤すればよく、実務面はほとんど副校長にお任せいたしておりました。しかし、校長はいわば学校のお父さんです。父親不在ということでは、子供たちがかわいそうです。ですから、全校の子供たちに直接話しかけられる、月曜の朝会を大切にすることで、父親不在感をなくそうと考えました。附属での4年間ほど、いろいろなジャンルの本を読んだことはありません。ラジオを聴いているとき、テレビを見ているとき、雑誌を読んでいるとき、いつも子供のことが念頭にありました。

ある日の朝会で“ドリトル先生”の話をしました。話しの中に「オシツオサレツ」という、お尻の方にも

頭のついている動物が登場します。話だけではイメージが湧かないだろうと、書いてきた絵を見せて説明しました。ところがそのあと、どこまで話をしたのかを忘れてしまったのです。ほんの数秒ですが話が途切れてしまいました。話を終えて「失敗したなあ」という思いのまま体育館をでました。そのとき、横を歩いていた2年生の男の子が「校長先生、いいお話をありがとうございました」と、とてもはっきりした声で言ったのです。子供ってなんてすごいんだろうと思いました。大学生はそういうことを言いませんからね。いまでもその子の声が聞こえてくるような気がします。

子供は学校でおしっこをもらしたり、夜おねしょをすることがあります。子供にとってはショックですよ。そこで、私は、小学校2年生の頃、校庭で“うんち”をもらしてしてしまったこと、4年生までおねしょをしていたことを打ち明けました。そのお話のあと、1、2年生の子供たちが、わあーと抱きついてきました。1、2年生はストレートに気持ちを表しますね。そのように、子供を励ましたつもりの私の方が子供に元気づけられました。

さて、附属の雰囲気をよく表していると思える、子供の言葉があります。これはPTA会報「ささりんどう」(平成8年度版)の中に掲げられたもので、卒業を前にしての6年生、山口哲生くんのメッセージです。じつは、平成8年11月号のFocusの連載記事「わが学び舎紀行」で、附属鎌倉小学校が取り上げられましたが、山口くんのメッセージがよく活かされていました。「宿題はないわ。校庭は広いわ。おまけに行事は目白押し。バルタン星人までいるところ。もう毎日が楽しいといったらありゃしない。附属よいとこ一度はおいで」

「バルタン星人」というのは私のことです。校長に赴任してまもない月曜日、学校に向かって段葛を歩いておりましたら、3年生くらいの女の子が近づいてきました。そして、「校長先生はなにじんですか」と聞いたのです。

「私は日本人に見えないのかなあ」と一瞬悩みましたが、思わず「バルタン星人です」と答えました。その子は、学校に着くなり用務員のおばさんに、「校長先生はバルタン星人って本当ですか」と聞きました。そしたら、おばさんは、「校長先生は大学の先生だから本当のことを言ったのでしょうか」と答えたのです。子供はそれで納得したようです。それ以来私は、UFOで附属に通うバルタン星人ということになりました。

今朝、相川さんから、「子育てと谷戸の保全」の活動に関するご紹介がありました。その活動と一脈通ずると思いますが、附属の2年生の生活科(従来の理科と家庭科の領域を総合した教科)の「土と関わり土を実感する」という授業を紹介します。これは、平成5年度の研究記録「心の育ちを願って」の中に報告された、加藤隆先生の実践記録です。

子供たちはまず、ペットボトルの田んぼづくりをし、稲の成長を喜びました。さらに、ミジンコ、ヤゴ、蛾の幼虫など、様々な生命が生まれ育っていることを知りました。また、草を積んでおいたり、生ゴミ消滅機「マム」、コンポストを利用して、土をつくることをしました。その際、土の中にはミミズ、ムカデ、それからもっともっと小さい虫(微生物)がいて、よりよい環境をつくり出しているのではないかと、というところが広がりました。生ゴミ消滅機に入れた生ゴミが数日で姿を消していくのを観察し、子供たちはびっくりします。子供たちはこんな感想を書いています。

「マムの中にどれくらいの虫がいるかわからないけれど、すごいいっぱいいると思います。マムの虫はふつうの土でも生きていられるんですか」(ともみ)

「マムの中の虫さんは、何でも食べちゃうね。きれいな食べものはないの？ わたしはあると思う。だって、わたしだってきれいな食べものはあるもの。虫さんもわたしとっしょにきれいな食べものをなくすようにがんばろうね」(ゆり)

「マムは給食の残りをいっぱい食べちゃう。骨、ごはん、いろいろなものが入っていても、びせいぶつはひとつずつ食べていますね。小さな虫も大きなものを平気で食べていて、すごいですね。びせいぶつは役に立ちますね。マムもびせいぶつも地球のゴミをふやさないことに協力してくれる。たのもしいね。ぼくたちも地球のゴミをふやさないようにがんばります」(ようすけ)

三学期に入ったある日、花壇で採れた朝顔の種を思

い出し、「あの朝顔の種をまいて育てたいな」と、相談にきた子供がいました。そこでクラスで相談し、自分たちで作っているコンポストの土、枯れ葉、草を使うことになりました。朝顔だけでなく、いろいろなものを植えたいという希望もあり、自分の気に入った花や野菜を育てることになりました。育て方を本で調べたり、家の人と話したりして、花の種をもってくる子供もいて、活動がどんどん広がっていきました。附属の保護者で、園芸の仕事をされている方をお願いして、黒土をトラックで運び入れてもらうことにしました。土が運ばれてくると、子供たちは歓声を上げました。そして、おじさんから土のお話をしてもらいました。そのあと、子供たちは、「土の種類、栄養」、「土にすむ虫」、「土の再利用」などについて、次々とおじさんに質問をしました。

土を作る準備が始まりました。コンポストの土とおじさんが運んでくれた土を、どのように混ぜたらいい土にすることができるかということについて考え始めました。ある子から、良い土を作るには、肥料やミミズや枯れ葉を入れるといいのではという意見が出されました。また、ある子は、マムの虫を黒土に混ぜようと提案しました。でも、「外の黒土では、マムのよう機械で土をかき混ぜないから、虫が死んでしまうからダメだ」という意見が出され、賛成されませんでした。いろいろな意見のぶつかり合いの中で、個々の思いが活かせるように、グループごとに良い土を作ることにしました。

4つのグループが土について考えました。そのうち3つのグループは、黒土、枯れ葉、コンポストの土をサンドイッチ状に重ねました。しかし、グループで少しずつ違いがありました。残りの1グループは最初から3つを混ぜ、さらにマムの中のおがくずを入れました。ミミズ、ムカデを入れたり、クラスで飼っているモルモットの糞を入れるグループもありました。それぞれ、他とはやり方が違って、自信を持って取り組んでいました。

子供の感想文です。「私はこの前、土を見ました。そうするとびっくりしました。この前やったばかりなのに、あまりにも枯れ葉がほとんどなくなっていました。土はやわらかかったです。なんか、ふわふわしていました。なんか、とても植物がよく育つ土になったように思います。すごく黒くなっていました」

(ともみ)

その後、子供たちは、土を運んでくれたおじさんにお礼の手紙を出しました。

「ぼくたちは黒土と砂とミミズを混ぜてみました。それで肥料みたいな土になるのかなと、ぼくは思いました。だけど、ぼくはいっしょうけんめいがんばったから、いい土になっていると思います。いい土にもしなったら、ぼくはトウモロコシの種をまきたいと思います。トウモロコシができれば、みんなで食べたいと思います。黒土をもって来てくれ、ありがとうございますました」(しょうた)

「黒土をありがとうございます。いい草花を育てていきます。わたしの植えたい花はアサガオです。家にアサガオの種があったので、学校にもって来ました。おじさんにもらった黒土に落ち葉を入れたり、コンポストの土を入れたりしました。ほかにもいろいろなものを入れました。そしていま、そっとしています。3月になったら、花を植えます。そして夏には、きれいな花を咲かせたいです。わたしがアサガオを好きなのは、花が咲いたあと、種ができて、また来年植えられるからです」(さえ)

ところがある日、ほかのクラスの子供が土山の上に乗って、土を踏み固めているのを何人が見つけました。固められた土をシャベルで柔らかくしようと、グループ全員で活動が始まりました。1年生のときは、重いとか洋服が汚れると言って、シャベルを持ちたがらなかった子供まで、一生懸命作業しました。

子供たちは、土が大切であること、土の中に命が生きていることを感じていたので、踏み固められた土を柔らかくしたのです。今まで意識していた土とは異なる思いが、子供たちの中に生まれ育ってきました。

子供の詩です。

「土はみどりをつくってくれる。みどりは空気をつくってくれる。空気の水分、川の水。それを土がのみこんだ」(せいとろう)

加藤先生は、報告書の最後でこう述べています。

「巧みな働きを持つ自然やその中に生きる多様な生き物など、自分を取り巻く全ての物が、たがいに関わり合い、寄り添って生きていることに気づいて欲しいと願って、土づくりの活動を始めました。この学習から、自然をはじめ、自分に関わる様々な事象に対し、さらに、自分なりの追及を続けて欲しいと願っています」

以上が、2年生の「土」に関する授業の成り立ちの様子です。加藤先生の土に対する深い理解、子どもた

ちに分かってもらうための入念な準備、子供の感性の輝き、それをさらに引き上げようとする先生、先生と子供が一緒になって、自然の営みの素晴らしさを発見、共有しようとしているのです。こういう体験で得たものは、子供たちの中に生涯生き続けるものと思います。

さて、先ほどの山口くんの文章にもありましたように、附属では沢山の行事をおこなっております。それぞれの行事はすべて、「子供の心を育てる」ことを目標としています。入学式、卒業式でも、子供の意志が反映されるよう配慮されます。バスや電車を利用して通学する新1年生には、近所の在校生が連れ添い、面倒を見ます。また、1年生と2年生はきょうだい関係を結びます。2年生は、弟、妹のためにカザグルマを作って、入学式の会場で、お手紙と一緒に贈るのです。そのカザグルマを6年生になっても、机のそばに飾っておく子もいます。緊張して入学式に来た1年生は、お兄さんお姉さんからカザグルマとお手紙をもらい、附属に来てよかったなあと思うのです。

行事の中で、子供たちの心の中に強く残っているのは、宿泊研修です。1、2年生は学校の体育館に泊まります。3年生は近くの施設に1泊、4年生は「真鶴の生活」で1泊、5年生は「千倉の生活」で2泊、6年生は「八ヶ岳の生活」で2泊の研修を行います。子供たちがこれらの合宿を体験し、それについてどのように考えているか、子供の書いたものを紹介します。まず、卒業式で6年生が読んだメッセージです。附属の卒業式のフィナーレでは、1年生から5年生は6年生を祝福する言葉を贈ります。6年は在校生にエールを返し、その中で3人が低学年、中学年、高学年の思い出を語ります。

平成8年度の卒業生、加納真人くんは、「中学年の思い出」を次のように語りました。

「今思うと、この6年間の小学校生活の中で、中学年が果たして来た役割はとても大きかったと思います。それは、自分が行うべきことを自覚し、実行し始める時期だと思うからです。初めての合宿生活の場となった、横浜自然観察の森の夜空には、家族や友達と毎月通ったプラネタリウムより、数倍美しい星々がまたたいていました。中でもオリオン座のすんだ美しさは忘れません。また、4年のとき、日帰りでもたびたび訪れた真鶴には、夏休み、附属の先輩でもある叔父など家族を案内しました。それ以来、遠藤貝類博物館の遠藤先生とは今でも手紙をやりとりしています。(中略)

附属小学校で学んだことは、人と競い争うことでは決してなく、人を思いやり、協力し合い、また、自己を確立し、各々の目当てを実現する力だったと思います。ぼくは身につけた、この自主、自立の精神と力をもとに、信念を持ち、常に反省する勇気と努力を怠らず、自分の道を探し、歩んでいきたいと思ひます」

私は現在大学で、小学校教員免許取得に必要な授業を担当しています。その授業の中で、日本における教育の基本理念のキーワードでもある、「生きる力」を子供につけるにはどうしたらよいか、ということについて書いてもらいました。たまたま学生の中に、附属出身の男子学生がおりました。彼が書いた文章を読んでもみます。

「いま、鮮明に記憶しているのは、小学4年生の初めての宿泊のことです。(当時は、宿泊研修は4年からでした)真鶴にいつて何をするのか計画を立てなければなりません、何もかも初めてで当惑しました。何度も計画を練り直しましたが、先生からOKサインができません。本番も近づき、僕には能力がないのかと思いつめたこともありました。けれど、家族と先生の励ましが僕をしっかり包んでいてくれたので、困難を乗り越え、計画も直前に完成し、「真鶴の生活」は大成功でした。僕にとって「生きる力」の原点はこの「真鶴の生活」にあります。なによりも、自分の力でやり抜いたという自信は、その後の「千倉、八ヶ岳の生活」、中学校、高校生活を送るうえでの大きな財産となりました。「生きる力」は容易につくものではありません。容易につくようにしてもいけません。大きな困難に直面しても、最後まで自分の力を信じてやり抜くことが絶対条件です。そして教師は、全人格を傾けてそれに対応すべきです。温かく見守るだけで十分です。しっかり見ているよということが、子供に分かるようにしてやればいいのです。子供には、最後に頼れるのは自分であるということ、身をもって分かってあげたいです。しかも小学生のうちに」

真鶴の宿泊施設は、横浜国立大学の「理科実習施設」です。50人泊るといっぱいですから、1クラス40名ずつかわりばんこに泊まります。1グループ10名ぐらいで、それぞれ計画に従って活動します。先生も一名ずつつきます。ときには教育実習生もついていきます。しかし、活動はすべて子供にまかせ、先生は後からついていだけです。ある年、1つのグループが真鶴駅を降りてから、目的地とは全く反対方向に歩き始め、

1時間ほどたって、湯河原の近くまで行ってやっと気づき、戻ってきたということがありました。先生は気づいていても指摘しなかったのです。「子供がどこで気づくかなー」と思いながら、黙ってついていったというのです。すごい忍耐力ですよ。私だったら「ちよつと、方角が違ふんじゃない。

地図を広げて確かめてみたら」なんて言ってしまいます。その先生は言わないのです。私とは修行のしかたが違うのです。グループの中でけんかが始まることもあります。でも、可能な限り放っておきます。次の日には仲直りしていますから。

5年生の「千倉の生活」、6年生の「八ヶ岳の生活」でも、どこで、どのように活動するのか、子供たちがグループごとに計画を立てます。現地に行くまでのルートも、それぞれ違います。先生たちはその計画を見て、子供たちが立ち寄り場所、例えば、駅、工場、博物館、研究所、市場、商店など、すべてに前もって挨拶まわりをします。地元の人には附属の子供たちが来るを楽しみにしてくれています。千倉の山口さんの海女小屋にいくと、横浜で買えば5千円はするアワビをいくつも料理して食べさせてくれます。私は1口で遠慮しますが、子供たちは「うめえ、最高」、なんて言いながら、むしゃむしゃ食べます。それが海女さんにとっては嬉しいのですね。八ヶ岳の美しい森にある土産物屋の藤森ご夫妻は、毎年子供たちにソフトクリームをごちそうしてくれます。ここでも子供たちは遠慮しません。自分で機械をまわしてソフトクリームをつくり、5個も6個も食べる子もいます。藤森さんにはここにこして、それを眺めています。先生にはビールをごちそうしてくれます。私は1本で遠慮するのに、5本も6本も飲む先生がいます。子供たちの発案で、藤森さんに合唱のプレゼントをするグループもあります。学校に帰ってきたら、かならず礼状を出します。そのような、地元の人とのつながりが伝統的に長く続いているのです。

昨年のPTA会誌「ささりんどう」に掲載された、「千倉の生活」をうたった、5年生の川柳を紹介します。

「魚釣りカニがつれたよなぜ釣れた」(ゆうご)
「青果市場何を言っているかさっぱりだ」(けん)(せりの状況を読んだものです)
「おじさんに市場でトマトもらったよ」(のりこ)
「いろいろな店で道をたずねたよ」(なつみ)

「千倉での人の心はポッカポカ」(さや)

付き添った実習生の川柳もあります。

アルミはく分けて捨てててといったのに」(宿泊所でのゴミの分別の状況です)

「ああねむいあつという間にもう朝だ」(先生は遅くまでミーティングをやっています)

次は先生の川柳です。

「枕抱きへそ出し寝る子に布団かけ」

「公園で子どもの声が子守り歌」

6年生の「八ヶ岳の生活」の2日目は山登りです。体力に自信のあるグループは高い山に挑戦します。

4時起きで、八ヶ岳の最高峰赤岳に登ったグループもあります。他のグループより低い山を目指したところも、目的を達せたということで、自信と満足を得ます。この夏、「八ヶ岳の生活」をした子供からの、私宛ての暑中見舞いを紹介致します。

「わたしたち6年生は八ヶ岳に行きました。天気もほとんど晴れで、予定どおりの活動ができました。

わたしたちのグループは飯盛山に登りました。思ったより大変だったけど楽しかったです。その日は天気がよくなって、雲が切れたいっしょんしか景色は見られなかったけど、すごくいい思い出ができました。

残念だったのは、夜、星が見えなかったことです。今、私は家族と八ヶ岳に来ています。また学校に来てください」(りさ)

「校長先生、元気にしていますか。私は八ヶ岳から帰ってきて死んだように寝ていました。鎌倉に戻って見たら死にそうぐらいの暑さでした。いくら八ヶ岳が暑くても、日陰もあるし、風もあるからまだいいのに、鎌倉なんて何もないんだもん。でも、たくさんいい思い出ができました」(こゆる)

二学期には三つのイベントがあります。運動会、コ



スモピア、音楽会と目白押しです。

いずれも子供たちが企画し、運営に携わります。運動会では全校で赤、青、黄、緑の四つのグループに別れて得点を競います。各クラスの中で、4つに別れるのです。中学年以上では、短・中・長距離の中から、自分に合ったものを選んで出場します。応援団長を中心に応援合戦をし、最後はたがいにエールの送りあいます。

「がんばれ、がんばれ附属」というエールを聴くと、じーンとしてきますね。明日からまたがんばろうという気持ちが湧いてきます。

コスモピアは、いわゆる学園祭で、各クラスが出し物を考えて、飾り付けから後片付けまで三日間を当てます。18クラス全部の企画、例えば、秋の自然館、恐竜のいた時代、劇、迷路、お化け屋敷、お店屋さん、などを見て廻るには結構時間がかかります。子供、おとうさん、おかあさん、近所の人が行列をつくっていることもあり、とても時間がかかるのです。フィナーレは、キャンプファイアーをたいてのエンディングセレモニーです。先生が思い思いの仮装をし、合唱します。私はピア大王に扮して、各クラスの催し物への感想を述べ、よいところ、面白いところを子供たちに伝えます。子供たちはとても楽しそうにしています。

音楽会は鎌倉芸術会館を借りて行います。各クラスで歌と合奏を披露します。時期はコスモピアの3週間ぐらいあとです。それまではコスモピアの準備に没頭していますから、歌、合奏の練習は、2、3週間しかありません。歌と合奏曲は子どもたちが選び、授業の合間をぬって練習をします。本番では指揮、ピアノ演奏もできるだけ子供たちに任せます。本番まで、様々な葛藤があります。選曲をし、各々の演奏楽器を選ばなければなりません。ときにはくじ引きで決めます。ですから初めて扱う楽器もあります。先生も歌い、演奏します。私は和太鼓、マラカス、ギロなど、初めてのものばかりやらされました。これが、なかなかうまくいかないのです。でも、子供たちは実に早く楽器をマスターします。一クラス40人の子供が様々な葛藤を乗り越えて、徐々に一つにまとまっていきます。音楽の先生によると、前の日まで音が合わない、大丈夫なと心配していたが、ひのき舞台上になると、ちゃんとまとまっている。子供のそういうとかころは、すごい思いますね。先生はああしろこうしろとは一切いわない。子供たちは本番になると、きちんとやると信じてと

いるようです。

運動会、コスモピア、音楽会には、おとうさん、おかあさんをはじめ、ご家族揃って来てくれます。将来、附属に子供を入学させたいという親御さんにも、来てもらうようにしています。行事は、附属をよく知ってもらえる格好の機会だからです。子どもの心の成長を手助けしようと先生たちは心をくだきます。しかし、先生はスーパーマンではありません。先生たちを支え、応援してくれる保護者に恵まれてはじめて、先生たちは力を強く発揮できるのです。私も、おとうさん、おかあさん方にずいぶん支えられました。附属でも「いじめ」があります。そのようなとき、PTAの総会で具体的にどのようなことが起こっているか、お話するとすぐに対応してくれました。行事の際、準備の段階から、おとうさん、おかあさんが大勢参加し、子供と一緒に楽しんでくれます。授業研究発表会の開催時にも、積極的にお手伝いしてくれます。お父さん達とはスポーツ大会をし、ときには酒を酌み交わしながら談笑し、子供のことを語り合いました。そんなことがきっかけで「おやじの会」がつくられ、父親同士の絆ができました。この夏、鎌倉八幡宮の境内で夏祭がありましたが、その際「おやじの会」は、盆踊り大会を企画しました。私もそれに参加し、楽しいひとときを過ごしました。おとうさん達は、いろいろな分野の仕事で活躍しておられます。おとうさん達の大きな潜在的力を引き出す努力をすると、学校教育はさらに活気付くと思います。

最後に、この春の卒業式の際、6年生の古屋史叔さんの読んだメッセージ「低学年の思い出」を紹介します。

「私に命があるように、生き物にも命がある。命の大切さにふれながら過ごした低学年の毎日。観音崎で季節外れのかたつむりに出会ったことが始まりです。わたしはこのかたつむりのことが気にいって、学校まで持っていくことにしました。有川先生に見せにいくと大きな虫かごをプレゼントしてくださいました。その虫かごがかたつむりの家になりました。1匹のかたつ

むりしかいなかったところに小池先生が、「1匹じゃあさみしいから」ともう1匹のかたつむりをくださって2匹のかたつむりの住む家となりました。

友達もかたつむりを見つけると、学校まで持ってきて虫かごの中に入れてくれました。そうしていくうちに虫かごはかたつむりでいっぱいになりました。ここまでかたつむりに夢中だった私ですが、だんだんとあきてきてしまいました。興味をなくしてから、かたつむりのことはずっとほったらかしでした。そんなある日、有川先生が、「家に人参があったから、かたつむりのエサにどうかな？」と人参を私の手にくださいました。「かたつむりが私も食べる人参を食べるの？」心の中は信じられない気持ちでいっぱいでしたが、人参をあげてみました。すると、人参に小さな穴があき始めました。食べているのです。私はとてもびっくりしました。「かたつむりも私と同じ物を食べる」これが最初に知ったかたつむりの知識。さらに、人参を食べたあとのかたつむりのふんはオレンジだということがわかりました。

それから私は面白くなって図書室でかたつむりのことを調べました。かたつむりのこともっとよく知りたい！！この思いから様々なことがわかりました。かたつむりは食べた物と同じ色のフンをするし、卵のカラーも食べるのです。本で調べていくうち、私のかたつむりに関する知識は大きく広がっていました。また、かたつむりに興味を向けた私に待っていたのは、新しい生命。かたつむりの赤ちゃんです。虫かごに土をしいたり、木を入れたり...、いつのまにやら自然のミニチュアようになっていました。ここで生命が生まれる。小さなかたつむりの赤ちゃんが産まれました。初めまして。ここがあなたの生きる世界。

あなたにももらった命の大切さをわかる心。あなたをとおして友達が増えた。ともに同じ世界で精一杯生きよう。生きるために命があるとわかった瞬間でした」

素晴らしいでしょう。古屋さんには、これを絵本にしたらと話しています。絵も得意な子ですから、きっと素晴らしいものになると思います。

イベント・募集案内

環境講座「循環社会の哲学と実践」

文明論と重ね合わせて循環社会のあり方提案されてこられた加藤三郎環境文明研究所長に基調となるご講演をいただきながら、市民の実践事例、企業の取り組み動向、都市と農村の新しい関係づくりなどのトピックの話題提供を受け、21世紀の循環社会に向けた取り組みをさまざまな視点から考える場としたい。

加藤三郎（環境文明研究所所長）

「循環社会の哲学とアプローチ」

竹田純一（里地ネットワーク事務局長）

「循環社会に向けた都市と農村の新しい関係」

毛利将範（エコシティ志木事務局長）

「循環社会への市民提案」

中條 寛（三菱総合研究所資源システム研究室長）

「エコビジネスの可能性」

日時：12月6日（月）13:00～17:30

場所：化学会館7階ホール

千代田区神田駿河台1-5 TEL：03-3292-6162

定員：100名

主催：環境情報科学センター（CEIS）

参加費：CEIS 会員（一般2000円、学生1000円）

非会員（一般3000円、学生2000円）

申込み・問い合わせ

WWFワークショップ

「FSCによる森林認証制度の実際

～適切な森林管理と木材流通のために」

適切な森林管理を進めるには、森林を管理・経営する側だけでなく、林産物を購入し使う側の十分な理解と協力そして責任感が必要です。今回のワークショップでは、FSCシステムでの認証の実際を紹介するとともに、あわせて日本で認証を展開するに当たった課題等について検討できればと考えます。

井上伸史（（株）トライ・ウッド代表取締役）

「都市と農村の共生での山づくり」

前澤英士（WWFジャパン）

「森林問題の現状、森林認証制度

特にFSCの背景・概要について」

川元将（エス・ジー・エス・ファーイースト・リミテッド 製品認証部部長）

「エス・ジー・エスの事業について」

ルース・ナッスバウム（エス・ジー・エス・フォレストリー クオリフォー・プログラムディレクター）

「エス・ジー・エス・フォレストリー

（FSC認定認証機関）の取り組み概要」

「認証の手続きの流れ」

「森林の認証基準及び加工・流過程の認証」

日時：12月6日（月）13:00～17:30

場所：大分県日田郡中津江村村民ホール

大分県日田郡中津江村栃野4351-4

逐次通訳付き（英＞日）

主催：WWFジャパン

（財）世界自然保護基金日本委員会

参加費：無料

申込み・問い合わせ

事務局からのお知らせ

書籍紹介

『SUPER ECO INNOVATER』

循環型産業都市モデル北九州エコタウンを見に行く 超環境産業革命

高杉晋吾著（ダイヤモンド社刊、2800円）

序章 時代の選択を求めて / 第一章 実証研究センター / 第二章 歴史をリードする / 第三章 総合環境コンビナート / 第四章 エコタウン以外の北九州環境産業の誇り / 第五章 ドイツ・ルール地方の産業構造の転換 エムシャーパーク構想の現場に行く / 終章 処分場科学・循環技術の時代

農山村漁村体験情報募集

小学館のムック『田舎で休日』第3号2000年春号で農産漁村における体験学校の情報を募集しています。

条件：2000年3月20日以降開催のもの

申込先：里地ネットワーク事務局までFAXまたは郵送にてお願いします。

FAX：03-3500-3841

申し込み期限：1999年12月20日（月）

投稿のお願い

里地通信では、毎回、会員の皆様に事例報告をお願いしております。皆様が取り組まれている活動について、自己紹介を兼ねてご報告いただき、広くネットワークに役立てるのがその目的です。

事例や里地づくりにかかわるテーマについての論文など、ぜひお寄せください。また、その際には、写真や図表などを添えていただきますようお願いいたします。

なお、里地通信掲載後は、ホームページへの転載をさせていただきます。さらに、今後、里地ネットワークとして事例集の発行などの際に、執筆者と相談しつつ役立てさせていただきたいと思っております。

投稿に関しまして、原稿用紙での執筆、郵送、FAXでもかまいません。ワープロ、パソコン等でお書きの場合、テキストデータをフロッピーや電子メールで送っていただければ、そのまま使えます。

「里地」実践テキスト好評販売中

「里地～人と人、人と自然が共生する地域づくりをめざす人へ」の実践報告、論文集はおかげさまで、各地で好評です。（次ページ事業経過報告参照）引き続き、テキストの販売を行っております。会員割引や大量部数割引もしております。事務局までお問い合わせください。

なお、定価は、1冊1,500円（送料込み）5冊以上1000円です。

次号は1月号、2月号合併号です。

2000年1月下旬から2月初旬に発行します。

皆様、よいお年をお迎えください。

（事務局一同）